



りんご生産情報第9号
(8月7日～8月27日)

令和8年8月6日発表
青森県「農林水産力」強化本部

着果量多い、見直し摘果の徹底を！
つがるの落果防止剤（ストップール液剤）の散布は8月15日頃！
日焼けや鳥害、風害防止対策を万全に！

I 概 要

8月1日現在の果実肥大は、各品種とも平年並み～平年を上回っている。

園地によっては成らせすぎの樹が見られる。適正な着果量になるまで見直し摘果を徹底する。

つがるの落果防止剤（ストップール液剤）の散布は、8月15日頃に行う。

今後は気温が高くなる見込みなので、徒長枝整理や支柱入れ、枝つり等の際は果実の日焼けを起こさないよう注意する。

「8月半ば」の薬剤散布は、黒石、弘前、三戸で8月15～16日頃、「8月末」の薬剤散布は、8月30～31日頃に実施する。散布むらが生じないように基準散布量を守り、降雨前の散布を徹底する。

野鳥による被害を防ぐため、鳥害防止対策を徹底する。また、台風の接近や強風に備え、風害防止対策に万全を期す。

農作業中の熱中症に十分注意し、1人での作業はできるだけ避ける。

ツキノワグマ出没警報発令中！

農作業の際は、ラジオを携帯するなど、ツキノワグマによる人身被害の防止に努める。
果実等の収穫残さや弁当の空容器などは、園地に放置しない。

Ⅱ 生育情報

1 果実肥大、つがるの果実熟度、作業の進み、病害虫の動き

(1) 果実肥大

各品種とも平年並み～平年を上回っている。

○果実肥大

(8月1日現在、横径cm、平年比%)

地 域	年	つがる	ジョナゴールド	ふ じ
黒 石 (りんご研究所)	本 年	7.6	7.8	7.0
	平 年	7.2	7.2	6.3
	前 年	6.7	6.9	5.6
	平年比	106	108	111
青森市浪岡北中野 (東青農林水産事務所)	本 年	8.0	－	6.7
	平 年	7.2	－	6.1
	前 年	7.2	－	5.7
	平年比	111	－	110
弘前市独狐 (中南農林水産事務所)	本 年	8.4	7.8	6.8
	平 年	7.4	6.8	6.2
	前 年	7.1	6.5	6.6
	平年比	114	115	110
板柳町五幾形 (西北農林水産事務所)	本 年	7.4	7.0	7.0
	平 年	7.2	7.0	6.3
	前 年	6.9	6.1	6.2
	平年比	103	100	111
三戸町梅内 (三八農林水産事務所)	本 年	7.9	－	6.8
	平 年	7.3	－	6.2
	前 年	7.7	－	6.1
	平年比	108	－	110

注) 各農林水産事務所のデータは農業普及振興室の生育観測ほ調査データ

(2) つがるの果実熟度

8月5日現在、黒石では平年と比較して、ヨード反応及び着色指数は同程度、糖度はやや低く、硬度及び酸度は低い。総合的に見て、熟度はやや進んでいると見込まれる。

○つがる(無袋)の熟度の進み

地 域	年	果重 (g)	着色 指数	硬度 (ポント)	糖度 (brix%)	酸度 (g/100mL)	ヨード 反応
黒 石 (りんご研究所)	本 年	187	0.3	16.9	10.2	0.323	5.0
	平 年	176	0.3	17.9	10.4	0.359	4.9
	前 年	159	0.0	18.4	12.1	0.351	5.0

注1 調査系統：普通系

- 2 平年：2006～2025 年までの 20 か年平均
- 3 着色指数：0～5（大きい数値ほど着色良好）
- 4 ヨード反応：ヨードデンプン反応指数 0～5
（小さい数値ほどデンプンが少ない）

（3）作業等の進み（8月4日現在）

見直し摘果、徒長枝整理や支柱入れが行われている。

（4）病害虫の動き

（8月4日現在 りんご研究所）

斑点落葉病	感染継続中 殺菌剤無散布の県予察圃での新梢葉発病葉率（スターキング デリシャス） （7月30日 本年：8.6%、平年：5.1%）
褐斑病	分生子による2次感染継続中
ハダニ類	卵～成虫が混在、幼虫～成虫が葉を加害中
リンゴコカクモンハマキ	※第1世代成虫羽化50%日（平年：8月26日）
モモシנקイガ	第1世代成虫の羽化及び産卵継続中
ナシヒメシנקイ	※第2世代成虫羽化50%日（平年：8月22日）
キンモンホソガ	第3世代幼虫主体 第3世代成虫羽化50%日（平年：8月25日）
ナシマルカイガラムシ	幼虫～成虫が混在 まもなく第2世代歩行幼虫が出現する

※調査園地にコンフューザーRが設置されており、対象害虫の誘引を確認できないことから、リンゴコカクモンハマキ、ナシヒメシנקイは平年値のみ示す。

2 作業の重点

（1）見直し摘果

園地によっては成らせすぎの樹が見られる。着果量が多いと、果実品質のほか翌年産の花芽形成にも悪影響を及ぼすので、今一度着果量を点検し、肥大の劣る果実や形の悪い果実、病害虫被害果、さび果等を主体に、適正な着果量になるまで見直し摘果を徹底する。

（2）徒長枝整理、支柱入れ、枝つり

樹冠内部に日光を入れ、薬液の到達をよくするために、不要な徒長枝を切り取る。また、果実が大きくなるにつれて枝が下がり、重なり合ってくるので支柱入れや枝つりを行う。

なお、今後は気温が高い見込みである。主枝や果実の日焼けの発生を防ぐため、過度な徒長枝の剪去や、早い時期からの強い葉摘みは避けるほか、高温時の支柱入れ、枝つりは控える。

（3）遮光資材の樹上被覆による日焼け果の発生軽減

晴天で真夏日（最高気温 30℃以上）が予想される前日までに被覆し、日焼け発生の可能性がなくなり次第取り外す。遮光資材は遮光率 10～20%程度のものを使用し、

着色管理等の邪魔にならないよう、支柱等を利用して樹上に設置する。なお、遮光率の高い資材は、年により収穫遅れや着色が損なわれるので使用しない。

(4) 収穫前落果防止剤の使用

ア ストップール液剤（1,000 倍、展着剤不要）

未希ライフときおうでは8月10日頃、つがるでは8月15日頃に単用散布する。使用回数は1回、10a 当たり散布量は350～400 L とする。

ストップール液剤は葉から吸収されて効果を出すので、葉に十分かかるようにする。葉摘みは散布後少なくとも4～5日経過してから始める。散布後7日間は収穫できないので注意する。

早出しを目的とした極端な早期散布や2回散布、着色促進剤との併用などは、果肉の軟化や油あがり著しく早まるほか、年によっては裂果やつる元の腐敗が発生するので、絶対に行わない。

イ ヒオモン水溶剤（2,000 倍、展着剤不要）

きおうでは8月10日頃、つがるでは8月20日頃に単用散布する。使用回数は1回、10a 当たり散布量は300～600 L とする。

薬液が葉先から滴り始める程度に、樹全体に丁寧に散布する。葉摘みは散布当日から始めても落果防止効果は得られる。散布後4日間は収穫できないので注意する。

ヒオモン水溶剤を使用した果実の熟度の進みや日持ちは、無処理の果実と同等である。

(5) つがるの着色手入れ

つがるは果面温度の上昇や直射日光により日焼け果が発生しやすいので、早くからの強い葉摘みは控える。葉摘みはある程度着色した頃から初め、収穫までに2回程度に分けて行う。極端な高温の場合は、葉摘み作業を控える。

(6) 「8月半ば」、「8月末」の薬剤散布

「8月半ば」の薬剤散布は、黒石、弘前、三戸で8月15～16日頃に実施する。

「8月末」の薬剤散布は、黒石、弘前、三戸で8月30～31日頃に実施する。

散布むらが生じないよう基準散布量を守り、降雨前の散布を徹底する。

無袋栽培では毎回、シンクイムシ類防除剤を使用する。

なお、「収穫前日数」に注意して薬剤を選択する。

○第 11、12 回目：「8 月半ば」、「8 月末」

地 域	散 布 時 期	基 準 薬 剤	散布量／10 a
黒 石 弘 前 三 戸	8 月 15～16 日頃	オーソサイド水和剤	800 倍
		又はアリエッティ C 水和剤	800 倍
		又はダイパワー水和剤	1,000 倍
	8 月 30～31 日頃	オーソサイド水和剤	800 倍
		又はアリエッティ C 水和剤	800 倍
		又はダイパワー水和剤	1,000 倍

炭疽病の発生が例年多い園地や高温多湿条件が続いて多発が懸念される場合は、オーソサイド水和剤を選択する。

褐斑病の発生が前年に多かった園地や多湿条件が続いて多発が懸念される場合は、アリエッティ C 水和剤を使用しない。

斑点落葉病が問題となる園地では、オーソサイド水和剤以外の薬剤を選択する。

アリエッティ C 水和剤は、殺虫剤又は殺ダニ剤と組み合わせる場合、最後に調合する。

(7) 褐斑病対策

被害葉は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

(8) 炭疽病対策

伝染源となるニセアカシアやくるみ類などは、りんご園の周りから取り除く。

また、発病果を放置すると二次伝染により被害が増加するので、必ず摘み取り、土中に埋める。

(9) 輪紋病対策

枝幹上のいぼ皮病斑が伝染源となるので、削り取ってトップジンMペーストを塗る。削り取りができない細い枝は、見つけ次第切り取り、適切に処分する。

(10) 斑点落葉病対策

急増が懸念される場合は、ポリオキシシン A L 水和剤 1,000 倍も使用する。

ポリオキシシン A L 水和剤は薬剤耐性発達の懸念があるので、連続散布を避ける。

(11) 腐らん病対策

枝腐らんは、見つけ次第切り取り、適切に処分する。切り取った枝等は伝染源となるため野積みしない。

胴腐らんも、見つけ次第、適切に処置する。処置が不十分であったり、誤った処置が行われている園地もみられる。今春に処置した病斑が再発する場合があるので、再度園地を見回り、確認する。処置方法については、令和 8 年 4 月 23 日発表「りんご生産情報第 2 号」を参照する。なお、青森県産業技術センターの Youtube 公式チャンネルにも掲載している。

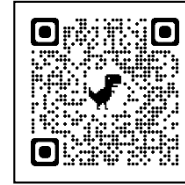
(<https://www.youtube.com/@aitcofficial/videos>)



トップジンM
オイルペースト
による治療



バッチレート
による治療



泥巻き法
による治療

(12) ハダニ類対策

園地により発生が見られている。発生動向を見極めながら適正な防除を行う。散布の目安は1葉当たり2個体以上あるいは寄生葉率50%以上である。殺ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので、農薬登録上、年間使用回数が2回以内のものでも年1回の使用とする。

ダニサラバフロアブル、スターマイトフロアブル、ダニコングフロアブルは同系統の薬剤なので、合わせて年1回以内の使用とする。

○リンゴハダニとナミハダニに対する殺ダニ剤の適用表

薬剤名	年間使用回数	リンゴハダニ	ナミハダニ
サンマイト水和剤	1回	○	×
バロックフロアブル	2回以内	○	×
カネマイトフロアブル	1回	×	○
オマイト水和剤	1回	○	×
コロマイト乳剤	1回	○	○
ダニサラバフロアブル	2回以内	○	×
スターマイトフロアブル	1回	○	×
ダニコングフロアブル	1回	○	×
エコマイト顆粒水和剤	1回	○	×
ダニオーテフロアブル	1回	○	○

○：効果が高い、×：効果が低い

(13) シンクイムシ類対策

被害果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

もも、なし、日本すもも、プルーン、マルメロなども発生源になるので、適切な管理を行う。

(14) ハマキムシ類対策

発生が多い場合は果実に接触している葉を早めに摘み取る。

(15) ヒメボクトウ対策

虫糞や木屑の排出を確認したら、エアゾル剤（園芸用キンチョールE、ロビンフッド）のノズルを孔から差し込んで噴射する。幼虫が枝幹内部を摂食した坑道は複雑に入り組んでいるため、他の排出孔から薬液が噴出するまで処理する。

(16) 恋空の収穫

着色を待ちすぎて収穫が遅れると果肉の軟化につながるなので、適期に収穫する。
山選果にあたっては、変形果や日焼け果、病虫害被害果などを取り除き、出荷先の基準により選別・出荷する。

(17) ビターピット対策

ビターピットは、幼果期の少雨、夏期高温の気象条件下で発生しやすい。近年、この条件が続いているため、積極的にビターピット対策を実施する。

下表によりカルシウム剤を直接果実に付着するように散布する。樹勢の弱い樹や高温時、あるいは干ばつ時には葉害発生（葉縁褐変など）の恐れがあるので避ける。

○カルシウム剤の散布方法

資材名	散布時期 (散布間隔)	資材形状	水 100 L 当たり 使用量 (倍数)	散布回数 (回)
スイカル	6 月上旬～9 月中旬 (10 日以上)	粉状	330 g (300 倍)	3～5
セルバイン	6 月上旬～9 月上旬 (10 日以上)	粉状	250 g (400 倍)	3～5
アグリメイト	6 月上旬～9 月中旬 (15 日以上)	液状	200 mL (500 倍)	5

(18) 苦土（マグネシウム）欠乏対策

欠乏症状が見られたら、直ちに葉面散布用の硫酸マグネシウムを 7～10 日おきに散布する。散布は症状の進行が止まるまで、1～4 回程度行う。

苦土欠乏は土壌の酸性化が原因なので、あらかじめ土壌診断を行い、自園の状況を把握する。

(分析の依頼先：J A 全農あおもり土壌分析センターか最寄りの J A 等)

○硫酸マグネシウムの使用方法

資材名	マグネシウム含有量	水 100L 当たり使用量 (倍数)
グリーントップ	16%	2,000 g (50 倍)
グリーントップ 70	23%	1,400 g (71 倍)

(19) 鳥害防止対策

野鳥による被害を防ぐため、以下の対策を行う。

ア ムクドリ（サクラドリ）、ヒヨドリ、カラスなどの被害が大きいところでは、防鳥網を使用する。防鳥網の網目は 35mm 以下とする。

イ 防鳥糸を張り巡らす場合は、鳥の種類に合わせた間隔（カラスの場合 1 m 以下）で張るようにするが、ヒヨドリは体が小さく、さらに飛行能力が高いため効果は低い。

ウ ディストレスコールを利用した音声機器や爆音機、かかしなどの防鳥器具は慣れが生じやすいので、同じ種類の器具を長期間使用せず、様々な器具を組み合

わせながら短期間で変えるようにする。

(20) 風害防止対策

台風の接近や強風に備え、防風網やわい性台樹の結束状況などを再度点検し、補強や取り替えを行う。幹や主枝などに空洞が生じている樹、雪害を受けた樹や枝、腐らん病の被害を受けた枝や樹は、支柱で支え、縄などで補強する。幼木は倒伏しやすいので支柱を立てて結束する。

3 その他一般作業

(1) 草刈り (2) 極早生品種の収穫

4 今後の作業予定 (8月28日～9月17日)

- (1) 樹上選果 (2) 早生品種の収穫 (3) 薬剤散布
(4) 日焼け防止対策 (5) 中生品種の着色手入れ (6) 落果防止対策
(7) 腐らん病対策 (8) ビターピット防止対策 (9) 苦土欠乏対策
(10) 鳥害防止対策 (11) 風害防止対策 (12) 草刈り

青森県農薬危害防止運動展開中 (6月～8月) !

《 農薬使用基準の遵守 》

農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認する。

農林水産省「農薬登録情報提供システム」 (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

農薬の使用にあたっては、事前に周辺住民に対し、農薬の散布日時や使用者の連絡先等を十分な時間的余裕を持って知らせるようにしましょう。また、農薬の飛散により、周辺作物や近隣の住宅等に被害を及ぼすことのないように農薬飛散低減対策に留意して散布しましょう。

《 熱中症対策を行いましょう！ 》

◎熱中症予防運動を展開中です (6月1日～8月31日)

熱中症による緊急搬送者が近年増加傾向にあります。1人での作業をできるだけ避け、こまめな休憩をとり、水分・塩分補給を行い、熱中症を予防しましょう。

◎労働者への熱中症対策が義務化 (罰則あり) されています

昨年6月に労働安全衛生規則が改正され、労働者を雇用する全ての事業者に対して、熱中症対策が義務付けられました。

熱中症対応フローなど必要事項を記載した「張り紙」を事務所等に掲示しましょう。

「張り紙」のひな型については、青森県農業・就農情報サイト「農なび青森」に掲載しています。



《 ツキノワグマ出没警報発令中！！（４月 20 日～11 月 30 日） 》

- ・ 1 人での作業をできるだけ避け、ラジオやクマよけスプレーを携帯するなど、人身被害の防止に努めましょう。
- ・ 果実等の収穫残さや弁当の空容器などは、クマを引き寄せる原因となるため、農地に放置せず、適切に処理しましょう。
- ・ 農地周辺の藪を刈払って見通しを良くすることで、クマの隠れ場所を無くし、クマが農地に近づきにくい環境を整えましょう。
- ・ 詳細は県ホームページをご確認ください。
(https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kankyo/shizen/kuma_cyuui.html)

《 農業保険に加入し、農業経営に万全の備えを！ 》

農業保険には、果樹共済、農業経営収入保険などがあります。自分の経営にあった保険を選択、加入して、自然災害をはじめとしたリスクに備えましょう。
詳しくは、お近くの農業共済組合まで、お問い合わせください。

《 農作業安全を心がけましょう！ 》

先日、りんご畑で草刈り機の下敷きとなり、農業者が死亡する事故が発生しました。農作業安全のポイントを意識しながら、「みんなで声がけ！安全確認」を心がけ、安全第一で農作業事故をなくしましょう。

山火事など火災の発生防止に努めましょう！

次回の発行は令和 8 年 8 月 27 日（木）の予定です。

連 絡 先：りんご果樹課生産振興グループ
電話番号：017-722-1111 代表
内線 5144、5149
017-734-9492 直通